

猿 橋  
小学校

# 瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

## 無限の可能性

校長 瀬谷 一男

昨年より17日も早かった初雪。今年の冬将軍は随分せっかちだと思ったが、平年との差は5日早いだけだったという。そんな雪の舞う朝でも、白い息を弾ませて元気に登校して来る子どもたち。一日の活力をもらう瞬間だ。

先日、テレビで両腕のないアーチェリー選手のドキュメンタリーを見た。ロンドンパラリンピック銀メダリスト、マット・スタッツマン選手(アメリカ)。生まれつき両腕のない彼は、足の指と肩を使って矢を放つ。アーチェリーでは、手元で生じた1mmの誤差は、50m先の的では6.6cmものズレとなる。これでは、直径8cmの的の中心を捕らえることはできない。しかも、足で弓を固定することは腕に比べてはるかに難しいという。ほとんどぶれることなく、正確に次々と的を射抜く様は、まさに神業だ。

更に驚いたことに、スタッツマン選手は、283.47m先の的を射抜くという、ギネス世界記録ももっている。これは、それまで障がいのない選手が保持していた200mという記録を大幅に上回る驚異的なものだった。障がいの有無に関わらず、アーチェリー選手として世界一になることにこだわった挑戦だった。スタッツマン選手は言う。「僕は自分のことを障がい者だとは思っていません。皆さんと同じように能力のある一人の人間です。何も変わらないのです。両腕がなくとも自分には限界はないと信じて生きてきました。これからも、どんなことも達成していくつもりです。」この言葉どおり、番組でも両足の指を器用に使って、食事や歯磨き、車の運転やタイヤを交換までする姿が取り上げられていた。

なぜ、こんなことが可能になったのか。その鍵は、両親の子育てにあった。両親はスタッツマン選手を特別扱いせず、両腕のある子と同じように育てた。社会の環境は決して我が子に合わせてはくれない。だから、家庭でもあえて家を改造したり、手を貸したりせず、できることは自分でさせるようにした。もちろん、スタッツマン選手自身の並々ならぬ努力は言うに及ばないが、この厳しくも深い愛情に裏付けされた一貫した教育方針が、スタッツマン選手の可能性を引き出し、「今」につながったのは間違いないだろう。

私たちは目の前の子どもたちに、手を掛け過ぎてはいないだろうか。逆に、必要な支援を怠っていることはないだろうか。自問せずにはいられなかった。

子どもたちは無限の可能性を秘めている。一人一人が、その子らしく成長し伸びていけるよう全力で支援する、そんな学校でありたい。2学期も残りわずかとなった。

